

擔の地域に就いてのみに限定されず、隨所に地政學的思考に關して話されて居る事には、教示される所大と言はねばならない。多くの圖版が一般には珍しいものが多いのも嬉しい。

南方建設の重要性は今更説くまでもない。敵が猪突し來つた日本本土と南方との連絡遮斷の態勢に怖氣が如く、その重要性に眼を閉ぢるとすれば、それは必勝の信念の缺如を意味する。しかも卒直に言つて、現在その最も憂ふべき怖氣が時として世に見出され得るのではないか。此の時に當つて本書『大南方地政論』は世に敵必滅の氣概を昂めるものとして、廣く讀まるべき使命を帯びてゐると言ひ度い。讀み易いといふ特徴は恰もその使命の爲に用意されたかのやうである。(昭和二十年一月、太平洋書館、A5版三三〇頁、圖版三三葉、定價五圓)(村上次男)

彙 報

史學科新入學生

前年の學制改革に伴ふ新しい事體として本年四月一日、史學科に本科生六十五名(内専門學校卒業生一名)撰科生七名の新入學生を迎へた。是等の學生は昨年十月の入學生同様直ちにその專攻科目を決定して、非常時對策としての一年間授業停止に關する處置確定に至るまで、從來の立前に依る講義に出席してゐる。なほ決定した各科專攻の人員は次の如くである。

國 史	本科 三十名	撰科 三名
東 洋 史	本科 六名	
西 洋 史	本科 九名	
地 理 學	本科 五名	撰科 四名
考 古 學	本科 三名	

宮崎教授の應召入隊

東洋史第二講座擔任の宮崎教授は過般名譽の應召を受けて、勇躍當地を出發、〇月〇日無事入隊せられた。出發に先立つて三月二十二日午後四時半から陳列館貴賓室で史學科教官の壯行會を催して、同教授を中心に、西田・那波・中村・梅原・藤・田村・村田等の諸教官出席、食事を共にし、また千道雄氏の點茶になごやかな時を過し八時前に散會した。

國史研究室近況

見學、毎年秋季に行はれる大規模な見學旅行は國史研究室の重要な行事の一となつてゐたが、愈々緊迫せる時局下の諸般の事情は近來この形式を踏襲することを許さなくなつた爲に、今年度は大和に於ける兩度の古代文化遺蹟の探求を以つて代へることになつた。

十一月二十六日(日)には飛鳥地方の見學を試み、西田教授、藤助教、東伏見講師の引率の下に學生、生徒等約二十名は、先づ岩屋山古墳(圓墳・切石石室)を調査、次いで欽明天皇棺隈坂合陵に詣り、棺隈墓域内の猿石を瞥見し、鬼廁、鬼組を経て、天武天皇・持統天皇を合葬し奉る棺隈大内陵を拜す。これより菖蒲池古墳(圓墳・石棺)弘福寺(川原寺)址を探ねて橋寺に入り、中食の後、久しく奈良帝室博物館に出陳されてゐた太子繪傳(傳土佐光信筆)、日羅立像をはじめ幾多の什寶を拜觀し更に石舞臺古墳(上圓下方墳)、飛鳥大佛(安居院)を巡訪して、薄暮迫る頃飛鳥國民學校庭に近時發見された古錢出土の石積の機構を見、飛鳥坐神社に於いて所謂飛鳥鍋の珍味を賞して、故京の文化を語り、出動間近い學徒の行を壯にした。

十二月十日(日)には藤原京より三輪にかけて見學を行つた。

西田、東伏見、柴田の諸教官の指導の下に先づ元藥師寺址に到つて、今もなほ整然と配置されてゐる諸堂伽藍の礎石の遺構に天武天皇御創建の規模を偲び、藤原の宮迹に立つては三山に囲まれた帝都の構想に思ひを致し、鴨公國民學校に小憩して多くの出土品

を縱覽した。それより史蹟富む故京の地を東して安倍の文珠院に入り、午後には境内の東西古墳をはじめ艸葺等莊麗な横穴式石室を尋ねて聖林寺に十一面觀音を拜觀、その流麗な乾漆像に對して法悦に浸つた。更に櫻井を経て金屋に石佛を見、大神神社に參拜加藤宮司をはじめ三輪町有志による懇篤な饗應をうけて夜深く歸洛の途に就いた。

年改つて二月十七日(土)には西田教授はじめ研究室職員らは大和丹波市町の天理教本部を訪ね、中山管長の案内によつて祖靈殿、教祖殿等を巡歴、教義儀規等を聴いた。次いで同教圖書館に於いて多年蒐集による平重時家調、古老口實傳、稿本日本外史等と漢洋の稀觀書の展示を受け、殊に古義堂文庫の諸書を閲覽し得たことは一段の喜びであつた。

又この頃勤勞動員に挺身する國史專攻學生生徒の休日を利用して、二月二十日(火)には洛西御室仁和寺に會し、多くの貴重な史料を拜見、三月二十日(火)には折から陽明文庫に奉展する歴代の宸翰を拜觀し、次いで嵐山渡月橋畔なる車折神社御旅所に於いて座談會を催した。

西洋史讀書會例會

昭和十九年度第十回例會。十二月七日午後三時から陳列館賞資室にて開催、原教授、鈴木、井上兩助教以下十五名出席。

一、神聖戰爭 (China) に就て 岡島誠太郎氏

同第十一回例會。昭和二十年二月十七日午後二時から西洋史研

究室にて開催。井上助教以下五名出席。

一、ローマの政治と經濟 井上 智勇氏

同第十二回例会。同三月十七日午後一時半から原教授室にて開催。鈴木助教以下八名出席。

一、フランク王の Legends 國に就いて 鈴木 成高氏

同第十三回例会。三月三十一日午後二時半から原教授室にて開催。鈴木助教以下七名出席。

一、ユーラシア學派のロシア史觀 中山 治一氏

考古學教室近況

一、小林助手壯行考古學談話會 小林助手が應召を受けて入團することになったので、一月十五日午後二時から考古學教室に於いてその行を盛んにする爲に臨時談話會を開いた。會するもの當の小林助手をはじめ、梅原教授、田村助教、東伏見・村田兩講師以下大學院學生・專攻生等十數名で、各自持ち寄りの茶菓を喫しながら、同助手を中心に歡談に時を過して薄暮散會した。

二、及川副手の急逝 小林助手の入團後教室の庶務に當ることになつた副手及川幸君夫は二月二十三日急逝した。享年二十八歳。君は京都府の人、及川義夫氏の長男として大正七年四月出生、京都第三中學校、廣島高等師範學校文科を経て、昭和十五年四月十五日日本學文學科史學科に入學、考古學を專攻して、同

十七年九月二十三日優秀なる成績を以て卒業、引續き大學院に入學「古代東亞文化の考古學的硏究」を專攻の題目として硏究につとめ、昨年十月からは副手に任じてゐた。この間卒業後間もなく京都府寺院重寶臨時調査の實務に關係し、ついで十八年五月からは滋賀縣史蹟調査の事務を依囑せられ、なほ今非學士の日本學術振興會硏究助成に依る近畿地方遺蹟地名表作成の業をも助けなどして、精勵事に當り、着々成果を挙げつゝあり、引いて將來の大成が期待されてゐた。されば君の長逝は時局下の痛恨事として悼まれる次第である。君の生前の業績としては卒業論文たる「古代東亞文化の一側面」——特に馬具を中心として——をはじめ三四の未定稿があるが、本誌前號に掲げた紹介欄の一文が絶筆となつたのであつた。目下梅原教授の手で未定稿の類が整理せられて居て、その一部の發表が考慮せられてゐる。

會 報

史學研究會新發足

兼て一般出版企業整備に伴ふ處置として手續中であつた出版事業體たる本會は、昨年十一月二十九日附で主務官廳から専門雜誌出版事業體たる認可があつた。依つて直ちに既定の方針に従ふて事業を開始した。ちなみに本會の出版會員番號は第二五五九〇番で、その雜誌發行の責任者は西田教授、また編輯責任者は梅原教授である。

庶務會計擔任委員の交迭

本年四月同委員たる不破幹雄氏が一身上の都合で辭任したので委員藤原利一郎氏に後任を依頼することになつた。

會 員 動 靜

◇ 入 會

東滿總省延吉縣龍井街第二國民高等學校長 岡 林 精 一
 京城府中區南山町一丁目一三 高 橋 鎗 四 郎
 廣島縣立新庄高等女學校内 宮 庄 米 一
 徳島縣立阿波中學校内 板 東 正 民
 埼玉縣立熊谷中學校内 報 國 剛
 滋賀縣立八日市中學校調査班代表 小 菅 敬 三

岡山縣立師範學校歴史教官室
 鳥取縣東伯郡浦安町大字逢東
 大阪府立高津中學校地歴科代表
 栃木縣立眞岡中學校内
 東京都豊島區長崎二ノ二四ノ二
 埼玉師範學校
 高知師範學校
 大分縣立臼杵中學校
 宮城縣伊具郡角田町八二
 愛知縣中島郡稻澤町下津片町六一
 京都市左京區下鴨中川原町五三
 奉天市

東京都中野區橋場町二丁目
 徳島市上佐古町三丁目
 東京都蒲田區桃谷町三丁目八六六旭寮内
 八王子市横山町六〇
 宮崎縣兒湯郡妻町三宅七〇六九
 宮崎縣福島今町
 和歌山師範學校
 東京都向島區寺島町第七中學校内
 岩手縣立花卷中學校
 大分縣大野町
 松江市島根師範學校

滿洲國立中央圖書館

黒木重敏
 中原力藏
 島之夫
 片庭壬子夫
 荒卷茂
 山口榮吉
 吉川潔
 安達一郎
 森喜重
 大野金明
 尾田卓次
 佐藤要一
 岩淺敦俊
 宅間博
 鮎澤信太郎
 吉野忠行
 神戶信一
 圖書部
 岩本武壽
 藤枝正雄
 大分青年師範學校
 友田吉之助

東京都立第七中學校
松山市永木町
朝鮮京城師範學校
朝鮮江界公立中學校
長崎師範學校女子部

岩本武壽
重見辰馬
江田忠
平岩哲雄
山崎亮平

(以上本會事務所へ申込)

西宮市上甲子岡二番一ノ五〇〇ノ五四井上義雄方
植田良信
東京都世田谷區代田二丁目一〇〇五
西井克己
靜岡市西千代田町五〇
赤尾藤市
死亡 二月二十三日
及川幸夫

京都帝國大學文學部史學科

木村宏

同 上

服部昭

同 上

黒田俊雄

同 上

大野久男

同 上

西村元祐

同 上

川勝義雄

同 上

井ヶ田良治

和歌山市關戸四三八

谷井至一

(以上 梅原末治紹介)

◇轉居

京都市左京區田中野神町一八
大阪府中河内郡繩手村大字河内七四六ノ二三
西宮市今津巽町三六
京都市上京區大宮上ノ峯町七
東京都中野區朝日丘一三
鹿兒島郡川邊郡枕崎町立神
大分縣東國東郡東町國東高等女學校

濱田敦
岡村元市
長部和雄
羽田明
増井經夫
伊藤道夫
佐知弘文